

「木場の窓から見えるもの(元外交官の視点)」

当社顧問石井正文氏(前駐インドネシア日本国大使)による
気になる海外情報を原則第2、第4木曜日に配信しています。

第16回:初のオンライン対面型米中首脳会談(11月15日)の評価 2021年12月09日配信

【ポイント】

- 初のオンライン対面型米中首脳会談では、旧知の親密さをアピールする場面もあったが、具体論に入った途端、台湾問題、人権等で夫々の主張をぶつけ合う厳しいやり取りに。
- 気候変動などの協力できる分野では協力する一方、対立が紛争に至らないように「ガードレール」を作り管理する、という基本的認識が擦り合ったのはプラスだが、それで米中対立が無くなる訳ではなく、具体的問題に関する緊張は続く。
- その中で、核の「戦略的安定」に関する協議の「前進に向けて検討していくことで合意」したのは、前向きな具体的進展。
但し、諸刃の剣でもあるので、要注意+要対米働きかけ。

【本文】

- 11月15日に行われた、初のオンライン対面型米中首脳会談は、両国間に存在する問題が多岐にわたることを反映して、3時間半に及んだ。
- 冒頭、両首脳が笑顔で手を振り合う場面をプレスに公開、旧知の親密さをアピールする場面もあったが、具体論に入った途端、それぞれの主張をぶつけ合う厳しいやり取りに。
 - ・台湾
米側;「一つの中国政策」を再確認する一方、一方的現状変更に強い反対表明
中国側;レッドライン突破(独立に向けた動き)なら、断固たる措置
 - ・人権
米側;ウイグル族の人権侵害を懸念
中国側;内政干渉に賛成しない
 - ・経済
米側;「第一段階合意」(輸入拡大、知財保護など)順守を要求
中国側;中国企業への打撃を止めるべき

■気候変動などの協力できる分野では協力する一方、対立は対立として認め、それが紛争に至らないように「ガードレール」を作り管理する、という基本認識が擦り合ったのはプラスだが、それで米中対立が無くなる訳ではなく、具体的問題に関する緊張は続く。

至近では、北京オリンピックへの米側要人派遣の是非を巡る緊張の可能性。

■その中で、核の「戦略的安定」に関する米中協議の「前進に向けて検討していくことで合意」したのは、前向きな具体的進展。今後の具体化を注視。

但し、諸刃の剣であることに注意。

・核戦略に関する相互理解の増進などが先行し、中国の核軍拡停止と軍縮への転換という本質的問題が後回しにされる可能性。

・中国が、プロセス立ち上げを「進展」としてアピールし、時間稼ぎをする可能性。

・「戦略的安定」の行きつく先が不透明⇒万一、究極的に「相互に核を「使えない」という認識」に至る場合には、日本にとっての米国の核抑止力の意味を根本的に変える。地理的近接性+通常兵器での優位性に鑑みれば、台湾の現状維持さえも困難にしかねない。

⇒ 「戦略的安定」協議の今後の行方を十分注視+米国に対し日本側の視点をインプット

⇒ 1月の「NPT見直し会合」等の機会を使い、中国核軍縮への圧力をかけ続ける必要。

(以上)

りそな総合研究所 顧問 石井正文

問い合わせ先:りそな総合研究所 アジア室 石橋

メールアドレス: shuzo.a.ishibashi@rri.co.jp